



東北大学



国立大学法人
福島大学
Fukushima University



静岡大学

NATIONAL UNIVERSITY CORPORATION SHIZUOKA UNIVERSITY



東京大学

THE UNIVERSITY OF TOKYO

我が国全体への温暖化影響の信頼性の高い定量的評価に関する研究（沿岸・防災）

S-8-1(4) 沿岸・防災リスクの推定と全国リスクマップ開発

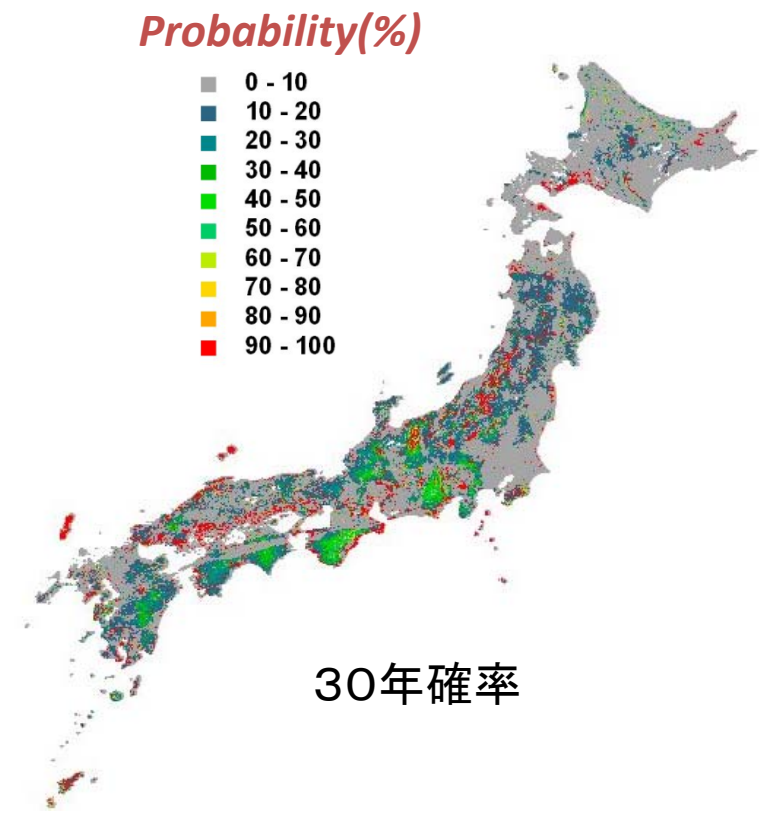
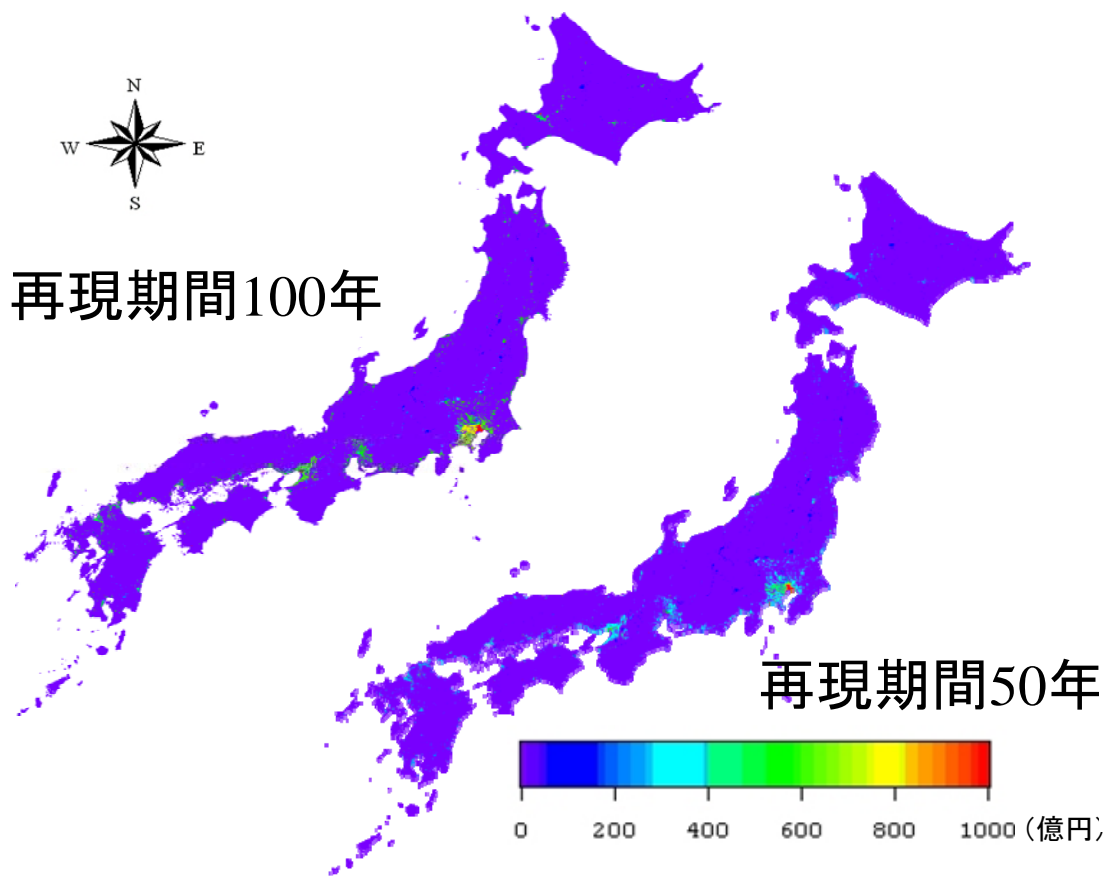
- 風間聡, 川越清樹, 横尾善之, 根木貴史, 有働恵子(産休中), 牛山素行, 瀬戸心太

評価内容:

洪水氾濫, 斜面災害, 高潮, 海岸侵食,
豪雨災害リスク評価

S-8-1(4)災害班成果

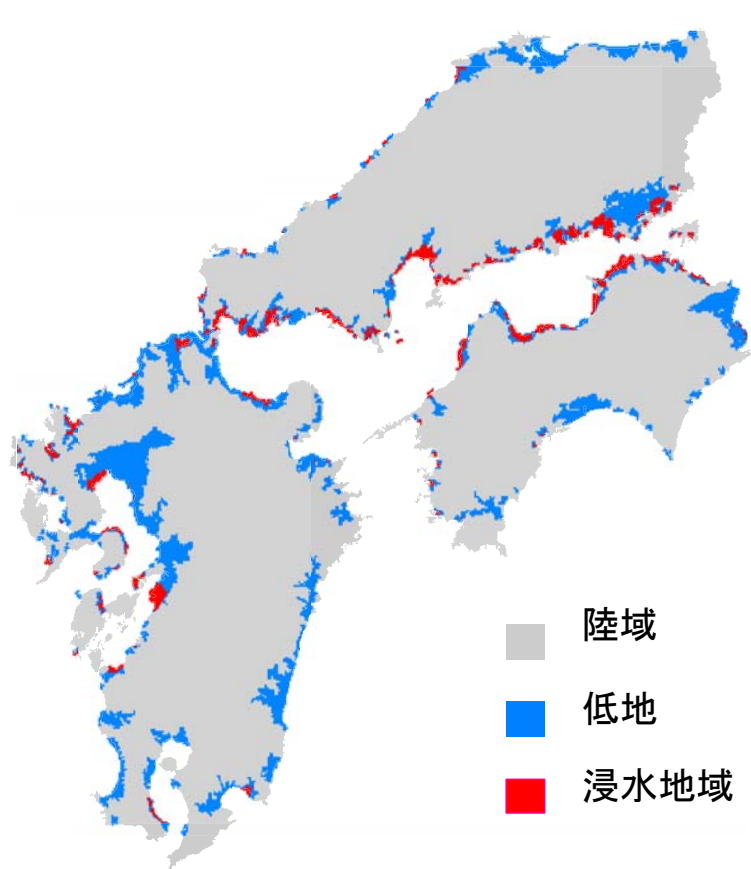
全国の洪水氾濫被害額の分布と土砂災害ハザードマップ



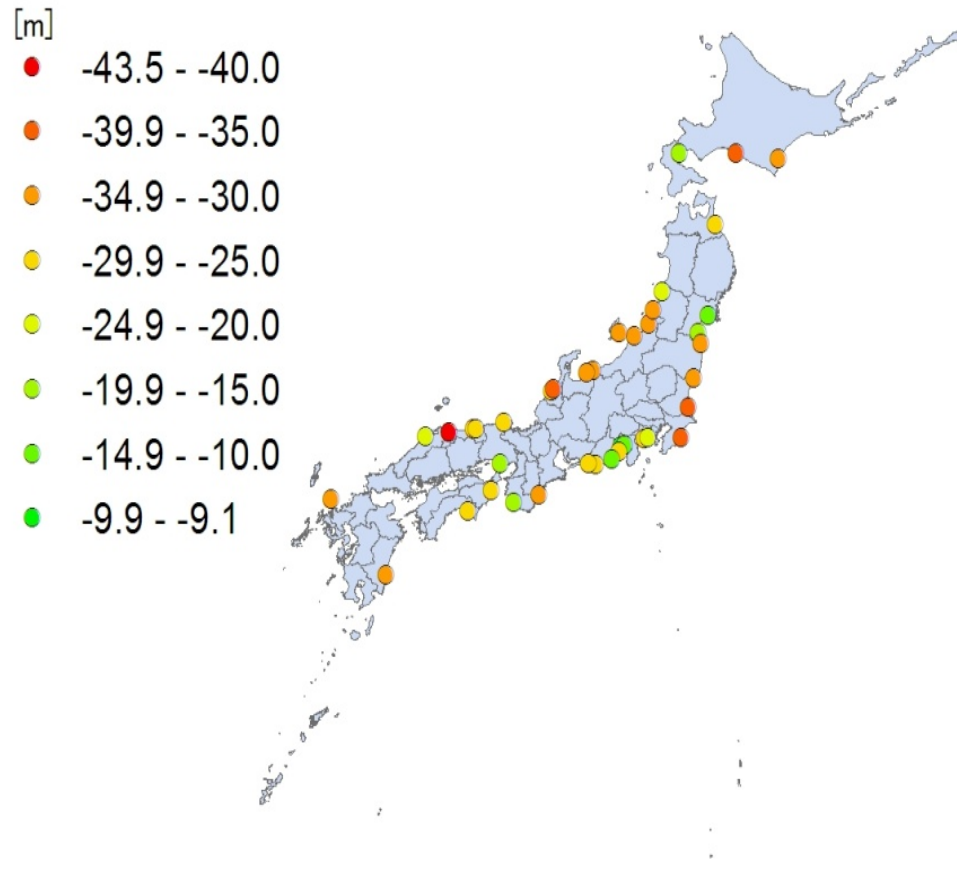
洪水氾濫被害額分布

斜面災害ハザード分布

将来の豪雨の増加によって、氾濫、斜面災害の被害の増加が地図情報で示されている。国土を俯瞰した適応策の考察に利用できる。



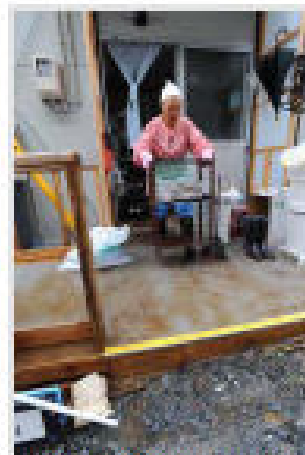
高潮浸水分布



100年後の砂浜後退長

温暖化による海面上昇によって、高潮浸水と砂浜消失が地図情報で示されている。それぞれが地図情報であり、重ね合わせにより複合的に考察できる。

「もう行くところない」仮設襲う雨・土砂・泥水 台風15号



浸水した仮設住宅から家具を運び出す住民＝22日午前9時ごろ、石巻市仮設

東北を直撃した台風15号による大雨は、東日本大震災の被災者が暮らす仮設住宅にも襲い掛かった。避難指示を受けて避難した住民らは一夜明けた22日、浸水した仮設住宅に戻り、疲れた表情で使片付けに追われた。土砂崩れの危険が高まっている仮設住宅もあり、住民は「いつになったら平穩に暮らせるのか」と、やりきれなさを募らせた。

阿武隈川の支流・須賀川があふれ、58戸が床上浸水した福島県須賀川市上北町の仮設住宅では、住民たちが朝から、家に入り込んだ泥のかき出しに追われた。市内の自宅が震災で全壊した入居者のマッサージ師大和田紀雄さん(64)は「ここには、もう住めない。また避難所暮らしに逆戻りか」と肩を落とした。

岩手県大槌町は、小縫高清水地区の仮設住宅を含む46世帯119人に出していた避難指示を解除。避難所から仮設住宅に戻った40代の主婦は「いつ崖が崩れるか心配」と不安そうに裏山を見上げた。

仮設住宅の裏山ののり面は5月、高さ約40メートル、幅約100メートルにわたって崩落した。仮設住宅の建設を決めた後に崖崩れが発生したため、町は土留めや崩落を感知するセンサーを設置している。

町によると、のり面の復旧工事は完成まで数年かかる見込み。主婦は「この仮設住宅は、アクセスが良く便利。不安だが、もう行くところもないし…」とつぶやいた。

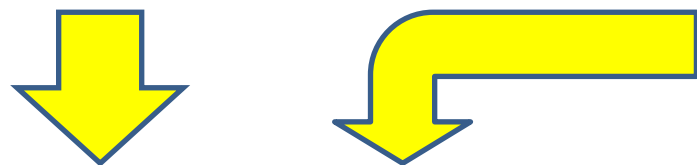
宮城県石巻市萩浜地区の「家ノ入地区応急仮設住宅」(13世帯28人)では、2戸が床上浸水。住民たちは疲れた体を引きずるように、ぬれた家具を運び出した。

宮城県女川町では21日夜、仮設住宅「清水住宅」「新田住宅」の計170世帯472人に避難指示が出たが、道路が濁流に寸断されたため、住民は指定の避難場所に避難できなかった。

入居者の勝又洋さん(63)は「近くの川が護岸を超えて氾濫し、住宅の敷地がえぐられてしまうのではないかと気が気でなかった」と話す。

住民たちは集会所に集まるなどして、水が引くのを待った。勝又さんは「津波の次は台風。女川のどこに住めばいいのか悩んでしまう町民も多いのでは」とうんざりした様子で話した。

気候変動と震災：適応策研究は震災復興にどのように役立つか？



適切な仮設住宅地の選定や都市計画，交通計画のためにリスクの低い地域を知る。

複合災害の観点でも適応策や復興に貢献。

防災計画は突発災害も気候変動も同じ。